

63 生体実験による結核予防法の確立

○美馬 聰昭・国中るみ子

一、はじめに

我が国は一九三一年九月中国への侵略を本格化すると同時に、細菌戦の準備を開始し、一九三二年から、生体実験を背陰河で開始したとされている。この生体実験の概略については、E. V. Hillの報告書（一九四七年）に述べられている。今回我々は、財団法人結核予防会から学術振興会第八小委員会の報告書（一九四三年三月発行）を入手し、詳細に検討した結果、結核予防法の確立のために膨大な生体実験を実施していたと考えられる確証をえた。

二、結核予防接種に関する報告書

第八小委員会は三五名の委員で構成されている。この報告書では、当時ヨーロッパでは広くBCGの経口投与

が行われていたが、効果がないと判断し、我が国では非経口的なBCGによる方法を選んだとしている。実験的研究のBCG毒性について、最もヒトに近い感受性のあるモルモットは、○・1mg以下では接種局所および局所リンパ腺の変化が生じないことを確認している。また、BCGの結核に対する効果については、非経口投与の場合、GGG接種量が多いほど免疫効果が増加するとしている。

三、生体実験という根拠

報告書の実験動物がヒトであるということを解く第一の鍵は、BCG接種後、接種局所に潰瘍が長期に続くという我々日本国民の体験であった。この観点から報告書に注意深く検討すると、BCGの毒性実験は人体実験によつてえられたものであるという疑いが生じる。モルモットは、BCGO・1mg以下では接種局所および局所リンパ腺に明らかな変化を示さなはずである。ところが、報告書での「モルモット」では、BCGO・1mg以下の接種でも接種局所に変化が生じ、長期持続しているのである。

実験動物がモルモットでないという説明の糸口を与えてくれた第二の鍵は、第八小委員会の一人である戸田忠雄の著書であった。彼は「戸田新細菌学」の中でモルモットに対する結核菌の毒性について、「モルモットは皮下に〇・一〜〇・一mg、または静脈内に〇・〇〇一mgの微量を接種されてもよく感染し……一〜二カ月内には斃れる」と述べている。にもかかわらず、報告書でのBCGの効果判定の実験では、これらの同量の結核菌投与においても大多数の「モルモット」は八週間以上生きていたのである。また、驚くべきことに、静注後八週間でモルモットが死亡する量の一〇倍にもおよぶ〇・〇一mgを投与されながら、一五週後に解剖された実験もある。さらに、第八小委員会のメンバーである柳沢謙委員は一九三五年の実験医学雑誌で、モルモットではBCGの接種量と結核に対する免疫効果との間に一定の関係はないと、自ら報告している。

四、考察

以上の理由から、実験に使用された動物はヒトと考えた方が妥当である。しかもこの実験で犠牲にされた人間

は二八四七人にも達している。一九三一年、中国の背陰河で関東軍の秘密部隊が細菌戦に対する生体実験を開始したが、背陰河でどのような生体実験が行われたかについてはいまなお内外を問わずほとんど解明されていない。奇しくもこの年は、結核予防のための実験が開始された年でもあった。実験の規模から考え、細菌戦のためではなく結核予防の実験が主体であったと考えられる。

一方、この実験を推進してきたのは、厚生省の設立（一九三八年）に主要な役割を果たした小泉親彦であった。しかも、この第八小委員会報告書が、正式に提出された一九四三年の厚生大臣でもあった。一九四四年には、わが国のBCG接種者は一〇〇〇万人を突破した。そして背陰河の成果を基に敗戦の色濃い戦況を打破するために細菌戦のための生体実験に全面的に突入していったのである。

（稻積公園病院）